審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

幼児に見られる象徴遊び（symbolic play）は、ある事物を別の物であるかのように表現する遊びであり、認知の中でも表象機能の発達を反映すると考えられている。しかし、自閉スペクトラム症（以下 ASD）の子どもにおいては象徴遊びが生起しにくい。これまでにも ASD 児の象徴遊びについて検討はされてきたものの、ASD 児の発達年齢や精神年齢、言語発達水準等で統制したうえで定型発達幼児と比較する研究は行われてこなかった。また、先行研究では、ASD 幼児において象徴遊びが連鎖していく過程や、象徴遊びと言語発達との関連についても十分な検討がなされていない。本論文では、知的発達・言語発達ともに遅れのない初回評価時 2 歳半～3 歳半の ASD 幼児と定型発達幼児を対象とし、同グループの児を約 1 年半の期間に渡って追跡し、象徴遊びのレパートリーの広がりや連鎖の発達過程について（第 2 章）、これらの児の獲得語彙及び物語発話について（第 3 章）、および、ASD 幼児の象徴遊び行動のレパートリーや連鎖の発達と言語発達との関連（第 4 章）を明らかにすることを目的とした。十分に解明されなかった問題に多角的な観点から取り組み、時系列的に発達過程を検討するなど、従来の研究にはない意義と独創性が認められる。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

医療機関で ASD の診断を受けた生活年齢 30～42 か月の男児 10 名を対象としており、発達検査によるこれらの児の発達年齢から、本研究の目的に沿った知的発達に遅れのない児が選ばれており、対照となる定型発達児 10 名との統制も取れていたと考えられる。また、自閉症と関連した症状を量的に測定する SRS-2（対人応答性尺度第二版）も実施し、ASD の特性も十分に把握していた。母子の自由な遊び場面と課題設定場面とを併用し、遊び行動と言語能力の両側面の関連性についても検討が行われた。本研究の特筆すべき方法論上の特徴は、ASD 群、TD 群ともに同じ対象児を縦断的に 3 回に渡りデータ収集を行い、発達的変化に関する情報を収集したという点である。また、母子の自由遊び場面や課題場面の設定は幼児の興味関心に対応した題材を扱い、発達支援領域の研究として多面的かつ適切な方法が取られていた。さらに、同一の対象児を繰り返し測定し、群間の差異を縦断的に明らかにするための統計モデルも活用して検討した。以上のことから、本研究で用いられた方法は当該研究分野において妥当であったと判断できる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

幼児の遊び場面の観察は医療機関に併設されたプレイルームもしくは大学内のプレイルームにおいて、文書に基づく保護者の同意のもと、同様の設定及び参加者で行われた。遊びの質的側面を定型発達幼児と比較できるように観察時間や玩具も統制した。遊びの様子は録画され、スクリプトに書き起こされたうえで、遊びの類型化が行われた。また、5 秒間ごとのタイムサンプリング法に基づき象徴遊び行動の生起頻度およびレパートリー数をカウントするとともに、時系列的な遊びの流れをダイアグラム化し、象徴遊び行動の連鎖を分析した。生起頻度を求める際はビデオ記録の分析や類型化についても第三者の分析と比較し信頼性が担保された。幼児の言語発達面

については、標準化検査に加え質問紙を用いて保護者から獲得語彙について情報収集を行った。観察年齢時点間ならびに群間の差の有無を統計的に検定し、指標間の関連性ついては相関分析を実施した。さらに、事例的に発達的変化の質的検討も行っている。以上のことから、研究資料やデータの収集と分析についても適切と判断できる。

（４）研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

象徴遊びの発達過程においては、ASD 群では行動のレパートリー数や象徴遊び行動の連鎖の増加に制約があり、徐々に定型発達児との違いが顕在化する過程が認められた。その背景としては、ASD 幼児は出来事を他者の視点から捉え象徴化するといった能力や、出来事のスクリプトを結合させて一連の大きなまとまりとして捉える力に困難があると考察した。また、獲得語彙については、ASD 児群と定型発達児群は語彙獲得の総量に差は無いが、一部の意味的カテゴリーにおいて獲得語彙が少ないことが示され、背景として「限定された興味関心」や共同注意の困難さといった ASD の特徴が挙げられた。一方で、自発的な象徴遊び場面において、ASD 幼児がもっている象徴遊びのスキルを十分に表出していない可能性についても指摘し、客観的及び論理的な考察を展開している。以上のことから考察と結論は妥当であり、学術的な水準に達していると評価できる。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

ASD 幼児の象徴遊びや言語について認知特性を踏まえて多角的に検討し、新たな知見を提供した。ASD 児の遊びや言語の特徴は、保護者との遊びの相互交渉場面において、子どもが相手から受けるフィードバックの観点で定型発達児の場合との違いをもたらす可能性があり、大人は言語入力や出来事のつながりの提示といった工夫を行うことの必要性が示唆された。従来の研究で得られていなかった象徴遊びの連鎖に関する新たな知見を提供するという学術的な意義とともに、保護者と子どもとのかかわり方についても指針を示すという、発達支援の質の向上に貢献する成果を得たという点からも評価できる。以上のことから、本研究には取得学位にふさわしい意義や成果が認められる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に相応しい優れた研究であると判定した。